

樹木なれども、名を附するに躊躇すべきなり。此の疑問はデウイントが郊外の寫生の樹木を見て、常に起るものならねど、氏はやゝもすれば樹木の種類の性質を誤りて研究する傾向ありしなり。第二は此繪の空にて、デウイントの繪畫に普通ある處の雲と異りて、英國的美觀ある雲なり。デウイントは如何にするも、雲の形層と、風ある日和に付きては、完全なる研究者にあらず。氏が立派なるスケッチには、幾時も幾時も空を描かずに。殘し置きて、象牙色のクレスウィツク紙に満足して描きつゝありしなり。此の點はターナー、コックス、コリール等趣を異にせり。即ち英國水彩畫の雲雀の舞ふなる天空と異なるなり。デウイントが目を注げる處は、英國の土地と豐饒の收穫にてありき。氏は英國の地面の重みと、新鮮なる芳香を傳ふことに勤めけるなり。氏が有名なる收穫の景色は實に強壯なる英國の田畝の芳香と生命とが充滿せるなりけり。

コインフィールド、アイヴィンクホーの第三に認るゝものは、空の雲の一種變れるにあり。其色は濕潤ある灰色と滑かなる眞珠の調子にて蔦色の調子あり。こはインディアンレッドと他の彩具を僅に混えて、化學上の作用を起して出だせるものなり。インディアンレッドは單獨に使用するとき是不朽なれども（鐵の酸化物なり。）混合して用ゆるに危険なり。又下塗をして地面に暖みを帶びしむるには危険なるなり。例之ば「クリケタース」に於ては空の藍色を腐蝕して全體が狐色を呈しつゝあるなり。されどかゝる色彩の損傷の變化ある繪畫はデウイントの繪畫中に

は稀に見るものにて、多數の繪畫は時日を経るも無事なるなり。又一方にては油繪の或物は劈痕の入りて、これを修覆するに忙殺せらるゝ程なり。サウスケンシングトンにある有名なる「コインフィールド」の如きもこれに洩れず、空に圓形の劈痕が處々に顯はれ居るなり。宛らウイリアム、ブレイキの「エンシエント、オヴ、デース」が一對の丸にて侮辱されつゝあると全様なり。如斯なれば、彩具の優劣は措いて、デウイントの水彩畫は時を経るに従て油繪よりはより早く消滅すべしとば批評家のいふ處なり。

奈良雜詠

畔 川

初めて奈良に入る

夏霞 奈良は生駒に入る日かな

兩師已に在り講習生九十名と註せらる

秋暑き 幾間の人や 繪三昧

曉 起

松落葉 我一人ゆく 東大寺

春日 社

カナクゝやなぎの林の金燈籠

丸山師と歩む

歩みつゝ小萩折りつゝ語りつゝ

大下師と歩む

春日野や鹿の抜け道薄紅葉

若草山

書をかけば見居る女や鹿近し

大佛殿修理

人と鳩 高き足場や 秋の空

猿澤の池

ちり柳塔を仰いで人立てり

三笠山

月代にまだ起きて居る 三五人

法隆寺行

劫掻きに鹿やは居らで法隆寺

奈良を去る

ゴーと響く 鐘も行水名残かな

紹介

ラスキンは曰へり「余輩は十餘年間ターナーと相識つたが、彼れこそは世の罪惡を心から悲しめる一人であつて、更に他人の身上や行爲に就て罵聲など放つたことなく、又更に彼の不人情を仕打や憤怒面持を見た事がない、余は多くの人を知れど此賛辭に値するは唯だターナー一人である」云々

青年の友八月號に安藤氏の『畫聖ターナー』あり、畫を學ぶ人の一讀を要する好文字であつて、前記はその一節に過ぎぬ。

青年の友は、青年の修養上必讀すべき雜誌である（一部六錢、小石川小日向臺町二丁目、家庭の友社發行）

◎ヨボ記

薄田斬雲著

韓國の風俗案内等を書き出せる書は世間に澤山あるが、此書の如く實景のよく現はれてゐるのは少ない。尤もこれは文士の手になつたもので、内容は著者自身の實驗から出てゐるから讀んで甚だ面白い。韓國の様子を知りたい人、渡韓したい人に此書を御勧めする（四六形三〇五頁、定價六十錢、神田表神保町同文館）

◎女學生日記文範

文學士 中村枯林著

いさ子といへる浮世の塵につゆ染まぬをとめ子の東京遊學日記にして、四月出京に始まり翌年三月の試験迄の出來事、感想等を著者獨特の美はしき筆を以て誌されたり。いさ子の優しく女らしきうちに、毅然として世の浮華なる風潮と戦ひ、絶えず光明の希望を持しつゝ修養を積みゆくさまよく書かれたり。されば此書は、實に日記の文範たるに止まらず若き女子の身を修むる上に資するところ大なるべし。成美氏の挿畫また可なり。（三六形美裝定價五十錢、日本橋本町、金港堂）

◎國木田獨歩

新潮第九卷一號として

發行せられしもの、獨歩氏知友諸名士の筆になり、氏に對する感想、作品の評論、小學校以來の經歷、及逸事等を載せて殆ど剩す處なし。獨歩の作を喜ぶの人は、此書によつて其人となりを知れ、而して其作に對せば興味愈々多からん（菊判二百餘頁、價四十五錢、麴町土手三番町新潮社）